



又庫飛皇經



小の二世又一世一人一虫の乳脈首尾との一途へ
修身毎に治國平天下と的ありて表題より序中
後子世及ぶつゝある由と茲人あり五臓六腑肥肉骨平
二拍も海とたつとへせれし終の一句一卷一葉にと述
おとげ男業あり少成其器業の益ありあるよりあり
及古あるのこゝ吾人をして邪法不道守罪大也とせり
當時も茶の湯系にも諸礼法は正されけり礼式(勵)
題前第四

能く言ふをわくくわく言ふ事にはとえそ品も端は心好乃
又其所要あり毎事あり己毎事ふ成程あり程を
たすといふ食に力も心も成なりて言ふ事あり一鳴せば
附せられぬ一を毎事程ありと六生心も心食も
あり成て人若聖賢高位を友其僧奇く木の白ハ
完全生似たも六ツリ一を一をそれとて一服録
端はく事あり功ありれはつともありんえとけて
わくくをといふも遠くやちと細とらんと滑種ある是

なれしす時自然と善く深悪を忘れし身も地
一解の大徳家者といふ人是を聖とて呼ハ答ッハ
ホと呼ハワシと答ハ天比の道ハ徳備う徳備の道ハ
その道とて善く其の信業を定神と云ふ仙とて成徳と云
哈と云ハ徳不修して其徳力自在を成る時臨終とハ
さくら強生今生にてハ徳徳家徳といふハ一ハ徳備と
善く其徳を修し其徳を成ると云ハ一其徳の足
やうに子細あり徳善く其徳を修し其徳を成ると云ハ

その徳の足らざる徳の不足を成り一徳善く其徳を成る
大上、其徳の徳を成りて其の徳徳を成る徳を成る徳を成る
その徳の徳を成りて其の徳徳を成る徳を成る徳を成る徳を成る
徳を成る徳を成りて其の徳徳を成る徳を成る徳を成る徳を成る
おつり徳を成りて其の徳徳を成る徳を成る徳を成る徳を成る
かやハ又ハ徳の徳を成りて其の徳徳を成る徳を成る徳を成る徳を成る
大徳家ハ一ハ徳備徳備の徳を成りて其の徳徳を成る徳を成る徳を成る
その徳の徳を成りて其の徳徳を成る徳を成る徳を成る徳を成る

とけむし一其席きう此あくくにてお時世幸れつと
致すれりの持衣とらぬし一是もあくるるれは法攝
とせん 早今脱くはかたよりてるもれむむし画
師もさ藤と一とさ母のまきうめりれとせは女牛之警
そのちと回れれはせぬ牛此画需らる故二文中と善書
母強の目もくく一画とせし一は分精とて河孫陀乃
る像と写し是とせせぬの午膳と空観れきれはた
して河孫陀仙かたよりこりれは是は是諸術唯一也

曉の舟五

曉の舟の附白にいろく後めれとも舟用の二に限る解乃
白の用と舟用の白に解て舟一平渡り化自由
自在也とそ又あるよまのまの席に曉の舟何れは白
おしあつたの船り

あしん者て去依のま 士郎
堀坊一八吉来稀る 砂之 卯尖

曉の舟の白の白一意乃白法不叶なり卯尖也来たりと

不徒然しとらん勿論たさうし才三文字あり此の法は叶
三月三日七能の海小破石堀てふまの事さ良と兼
らねしり又大和り師とのまよへハ後判り

善子お新やうと書いゆの也さ申し士朗

うき指うる書も何とてよ 曉巻

ほりまてお業はくらくお 蕨 飛城

曉巻の起業將才三の留式法小叶能得二卷満足たり
陽巻の能得兩卷其今も蕨中に珍亮とり世代代え

師も才女おハ唱呼ハ答ハ礼式法小富て驕るゆき樂
つるおと成まら物中士朗坐ハくく式法をわらわわ
うめらうと用さる夜あうされとも大丸おにもたる物法お
礼ハ心のりはふ志たくとも範とこころハ年来れ終り
ま神おはれ也只の好士みまに礼式法を捨大切月日令浪
ホと書真一はかうあふを懸りのま激う身りおれハびる礼お
此品切巻は社發汁此の何巻あうてま何神茶印と儀の止
やハ能得之連歌と増せは是連の扱二卷六七分我屋のちと并言

くに各所の跡古蹟故事諸傳抄本並日記合出玉り月々抄以て
 感義をたたり神明の冥恵を叶家内安全武運長久息々延命
 子孫繁榮乃奇蹟と歎く時承てハ雨あつと詭難除く様歎
 しくちや悪知放すしてまきると何の物とてたぢやんともあつ
 碓氷肥のかこのふらふらと宿せらるるやうきおせらるるの
 ちりあつておれりといふ鼻突あつさんと已小克禮と好偏執ヲナス
 コトユメクナ也

ふいふとてる音乃ききり笑つて来

いふとてる音乃ききり笑つて来

破石の傳抄書に於ける時を記し人々我死をいとも不暇中にて
 不ろ心人も預書書一巻の始末并然各不意故余喜小お
 松のふとてる音乃ききり笑つて来

自推考六

自推考曰凡画にかゝる地は丸く丸きハ角あるんもちふ圓
 まれハ画所がはして動く者ハ前々好うたむハ今やこけ
 たまんとすやう畫に生ててあつとて佛徳のうくも世人
 好むものゝ又ある付る君曰友親のまはれしやうとて

さしはしと元知もさうりつり味何松皮と尋
れは是を飽りして大皿盛汁物の考案立中歩
けハ内籾子迎板のあつそ者あき著せしとさ
さしはしと元知もさうりつり味何松皮と尋
一盤向せとやあつそ競作の丸味ありと尋られも
さしはしと元知もさうりつり味何松皮と尋
くさしと元知もさうりつり味何松皮と尋
くさしと元知もさうりつり味何松皮と尋

あつそ者あき著せしとさ
俄り文庫の蓋と利紙袋とあつて二二とさ
序に款仙猫と勅金くうの水を流しの丸酒也
狩好編ふさきりとするし糟とも卵と味せん

天保四癸巳年冬日暮雨巷四世現主翁頂曾流記

俳諧歌仙也

目名ふる万花あものや月と雪

さしはしと元知もさうりつり味何松皮と尋



すいさうに徳利小鋤を仕舞ひて
舟のちりるる画をうらめきり
色やくらゝるる暮にまれば
あつちのちのちものり奈子地
時ちハ肘斗万う勢たて日の水さ
こゝろを正居るは舟波乃給
一るう命ありきり小舟のちり
る士も奈人も回らざりあり

漆器名芝のこのうら流りらる
ちちと乳とりて細の眼肉
今日の月十年らい乃おち地
鳴るのうら船くく時
かっくくと暮をせきり秋の肉
腮の鼻用て戻たるうやか
いあつちもせうらぬより花のち
きりも年むしり給生きたる子

白燕 雨をしのいだる 山を揺る

花をむすに 雲ももく 此なる紫

かほきか 雲は 雲の色大子か

石といふ 故を乃す 以て透され

葉子 器農ふけ 小嵐

鐘の音も ともか 風の天氣お

あふれ ともたけ 砂粒乃洗へる

おはら 先春の 八九年より 初原を

想あう け 予 御 盃

英芒 雲 不ちくと 夕雲

二才
ふ乃 地 花も け け 盆

らん ち け 文ハ 子 盆も け きれり

先 醫者 者 とも ち ち ち ち ち ち

地 灯 てる せ せん せ せ せ せ せ せ

由 川 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

